
隠れ鬼

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠れ鬼

【Nコード】

N6667E

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

何ものかの「遊び」なのか、生徒たちが次々消えていく。

古く都のあつたくに。そのとある高校。
生徒たちの行方不明事件が続いていた。

2週間のうちに4人。

どうやら彼らは登校し、校内にいるうちに行方をくらませたらしい。

事件か、事故か、自分の意志か？

彼らはいつの間にか、誰に気付かれることもなく姿を消していた。警察がいろいろ調べたが、彼らに行方をくらませる確たる理由もなく、4人は学年もバラバラで特になんのつながりも見いだせなかった。

最初の行方不明者が出てから3週目、ついに「現場」が生徒の一人によって目撃された。

2年生の女子が途中で会ったクラスメイトと共に登校し、玄関で靴を履き替え、気付くと、隣で同じく靴を履き替えていたそのクラスメイトが姿を消していた。どこに行つたのだろうと不思議に思うと、代わりに、少し離れたところでやはりクラスメイトの女子が真っ青な顔をして突っ立っていた。「あら、おはよう」と声を掛けると彼女はカバンを取り落とし、腰が抜けたようにその場に座り込んだ。

驚いて「どうしたの？」と駆け寄ると、彼女は震える指で下駄箱を差し、

「引き込まれた・・・。栄子が、箱の中に、引っ張り込まれた・・・」とガタガタ震える声で言った。クラスメイトはいったい何を言っているのだろう？と、彼女の指さすそのいっしょに登校した栄子の靴箱をふたを開けて覗こうとした。

「駄目よ！ 見ちゃ駄目っ！！」

座り込んだ女生徒は必死に言ったが、クラスメイトはかまわず靴

箱を覗いた。

靴箱にはグラウンド用の外履きがあるだけで、他に何も無かった。それから栄子の姿は誰にも見られることはなかった。不思議だったし、不安だった。かと言って玄關に座り込んでしまった女生徒の靴箱の中に引きずり込まれた」

という話を信じる者もいなかった。誰にも信じてもらえない彼女は午前中に早退し、以後けっして学校に行こうとしなかった。

行方不明者は5人になった。それまでもたびたび行われていたが、翌日警察は臨時休校となった学校を改めて徹底的に捜査した。

行方不明者たちの手がかりは何も得られなかった。

警察官や父兄が校内に見張りに立つ中、学校は再開された。

全校集会が開かれ、警察からの説明と注意がされた。今度は誰が消えるのだろうか。生徒たちは顔を見合わせた。

クラスに帰ってからのホームルームの時間、1年生のクラスだった。

ガタン、と音がして、担任教師が一番後ろの生徒を注意した。

「こらあ、吉田あ、ふざけてるんじゃないぞあ」

しかし、その生徒の姿はなかった。

「おい、どこ行ったあ？」

教師は伸びをしてその席を見た。生徒たちも振り返って見た。いなかった。消えてしまった。

「いやあああああつっ！！！」

一番後ろの席は生徒数の関係で2つしか席がなかった。真ん中のその女生徒の席と、窓際の女生徒の席と。その窓際の女生徒が立ち上がり、「いやあああつっ！！」とパニックになって泣き叫んだ。あろうことか窓を開けて2階から外に飛び出そうとして慌てて周りの生徒に押さえつけられた。

「いやあ、いやあ、いやあああつっ！！！！」

狂ったように泣き喚く女生徒は保健室に連れていかれ、睡眠薬を飲まされた。彼女は連れのクラスメートの手をきつく掴んで放さず、

「絶対、絶対、わたしから目を離さないで！」

と懇願しながら、やがて眠っていった。しかし完全に眠ってしまったから、級友の手は絶対に放そうとしなかった。

目覚めた彼女は教師や警察官に自分の見た物を説明した。

ほんの一瞬、まさしく「あつ」と言う間もない瞬時のことだった。しかし彼女の脳裏に焼き付いた情景を彼女は細部まで明瞭に思い出すことが出来た。

吉田郁「消えた女生徒は、ふと、机の中に目をやったのだそうだが、彼女は「・・・！」と驚き恐怖の顔をし、ズルリと、机の中に引きずり込まれた。右手が肩まで引き込まれた。横を向いた彼女は何の気なしにこちらを見ていた目撃者の彼女と目が合った。彼女も驚き呆気にとられた顔をしていた。吉田郁は「たすけて」と彼女に言おうとしたのだと思う。しかしそれを言う暇はなかった。ズルリと、顔が、縁に引つかかって斜めにねじれながらもズルツと中に引き込まれた。ビクンと跳ね上がった左手も、ズルリ、引つ張り込まれた。机の下あの狭い、引き出しというか棚というか箱の中に、引つ張り込まれ、入り口で折り重なっていく服のしわまではつきりと見えた。胴体が入ってしまうと、暴れようとする脚も、スルリと、引き込まれてしまった。

ガタン、と、浮き上がった脚が元に戻っただけで、机は何事もなかったようにただそこにあった。

吉田郁は、机の中に引つ張り込まれてしまったのだ。

しかし、机は念入りに調べられたが、教科書やノートが詰まっているだけで、どこも無理に大きな物を引つ張り込んだような形跡はないし、もちろん、吉田郁がその中に詰め込まれているようなことはなかった。

まるつきり信じられない話だったが、しかしでは彼女はどこに行ってしまったのか？ 教室から忽然と姿を消した彼女は、やはり以後誰にも姿を見られることはなかった。

その日姿を消したのは吉田郁だけではなかった。他に4人もの生

徒がいつの間にか姿を消してしまっていた。

目撃者である彼女は言う、吉田郁を引き込んだのは消えた他の生徒の誰かに違いない、と。

吉田郁の顔が引き込まれ、ジタバタする左手が引つ張り込まれたとき、ほんのチラツとだが、机から出て彼女の腕を掴む手が見えたのだ。青白く、青い血管が浮き出して、まるで生きている感じのない手だったが、ほんのチラツと覗いた手首は学生服を着ていたのだ。

生徒たちは噂した、消えた生徒たちは何故消えて・・・下駄箱や机の引き出しに引き込まれてしまったか？

「見つけてしまったから」ではないか？

そこに潜む「鬼」を。

隠れ鬼、隠れん坊。

鬼を見つけてしまった者がやはり鬼になってしまふ遊び。

彼らは、今も学校のどこかに隠れて、誰かが自分を見つけるのをじっと待っている。

行方不明者たちは帰ってこなかった。

犠牲者が10人になったこの日以来学校は閉鎖され、おそらく、二度と再開されることはないだろう。

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667e/>

隠れ鬼

2010年10月8日15時19分発行